

腦の作用の弱さを示し又一時かゝる状態ならば其
 兒は非常に衰弱して居るか疲勞して居るかを示し
 ます。そうしてかやうな兒は屢々頭痛を訴へるも
 のであります。注意しなければなりません。

(ロ)又兒童の二歩ばかり前で鉛筆の様なものを動か
 して見せる時に眼を動かさないうで頭全體を動か
 して見る兒があります。之は喜ぶべき現象ではあり
 ません。此事は精神が虚弱であるか。衰弱して居
 るか疲勞して居るかを現はすのであります。

(ハ)又眼の運動の非常にはげしい兒童があります。
 之は丁度身體がふるへるやうに目がふるへながら
 運動するのであります。指頭に起る自發的痙攣と
 よく似て居ります。神経質の兒の手が屢ふるへる
 やうに神経質の兒の眼は運動のはげしいものであ
 ります。

史傳



野村望東尼 (つづき)

下村三四吉

これよりさき、長藩が幕府の征討軍に對し、罪
 を謝して恭順の意を表せんとするや。同藩士高
 杉晋作等の壯士は、これに反對して、宜しく幕軍
 と抗戦すべしと唱へき。然るに、恭順黨の論は
 遂に勝を制し、蛤門の變に與かりし三家老を死
 刑に處して、伏罪の實を表せしため、交戦を見る
 に及ばずして事止みけること、前は略述せるが
 如し。晋作、憤慨に堪へずといへども、頽勢支ふ
 るに由なく、しばらく機を待たんために、望東尼

の郷里なる福岡に奔りて、月形洗藏に依りぬ。時に元治元年の十一月なり。洗藏は福岡の尊王黨の志士にして、長州征伐の際、三條實美公以下五卿を薩筑、兩肥及び久留米の五藩に分囚せんとの議ありけるを薩藩の西郷隆盛等と謀りて、その間に周旋し、遂に共に太宰府に移轉せらるるととなしたるも、この人の力によれる者多しといふ。かくて、高杉晋作の來投を受けたる洗藏は、同志と相謀り、望東尼に請うて、その平尾山なる別荘に世の耳目を忍ばしめぬ。望東尼晋作の志を憐み、快よくこれを承諾し、懇に待遇しけり。この時の事なりと聞く。望東の女弟子に吉村すがとて十四五歳ばかりの少女ありしが、晋作、ある日、これに向ひ、和女も大和魂といふことを知りてやと問ひしに少女とりわえず、われも同じ人

の形にひまれきて大和心をしらざらめやは」と答へければ、晋作ふかく感賞して措かざりきとぞ。望東尼が感化のほど想ふべきにあらざるや。

晋作は望東尼の別荘に潜みしこと凡そ二十日。この間、郷藩の情況は福岡の志士によりて頻々として傳へられしかば、一日も速かに歸國して義兵を擧げんとて、老尼の日來の厚誼を謝し、首途に就かんとす尼は、もとよりこの事のあるべきを知りたれば、かねて晋作のために新に調へ置ける袴、羽織、襦袢を贈りて贈とし、且つ「惜からぬ命ながかれ、櫻花、雲井にさかむ春をまつべき」との一首の歌さへ添へたり。晋作も、また一詩を賦して、これに答へ、あつきこゝろのこもれる新衣を着けて、出で立ちぬ。

前にもいへる如く、三條公以下の五卿が鏡前に

遷させられしは、慶應元年の正月なれば、晋作の歸國の折は、なほ長藩に居られしなり。晋作は、下關にて五卿に謁し、不日義兵を擧げて俗輩を討滅し、形勢を回復せしめんことを誓ひき。

已にして、征長總督は、事定まりしを以て、兵を解きて東に歸れり。下關に潜伏して時を待ちける晋作は、機至れりしとなし、即夜、かねて養成せる奇兵隊を率ゐて、恭順黨を破り、當路の重臣數人を殺して、全く藩論を一變せしめ、藩主毛利慶親父子を擁して山口に據りぬ、こゝに於いて、長州再征の議起り、五月十六日將軍家茂は江戸を發し、先づ京都に着し、尋ぎて大阪に入り、諸藩に令し、兵を長防の四境に進めて、海陸並び攻めしめき、この征討の軍は、しばしば敗れて功なく、遂に八月家茂薨去を期として師を收めしこと等

は、こゝに細説するの違なし。更に、望東尼の身上に立ち返りて述べん。

福岡藩にては、かねて、藩論は、正義派と俗論派との二つに分れ居り、先には、月形洗藏、早川養敬等の尊王黨（即ち正義派）藩論を制して俗論黨を退けしに、長州再征の議起るに及び、俗論黨はこれに乗じて、再び勢力を回復せんことを務め、種々の手段を以つて、正義の一派を讒構排斥せり。かくて、奇禍は忽ち尊王黨に及び、月形洗藏をはじめとして加藤司馬、建野健彦、筑紫衛等の人々はいづれも職をうばひて獄に下され、望東尼もまた、その孫助作と共に幽閉せられき。

實に慶應元年六月廿六日なり。（つづく）

浮雲のつかるもよしや武夫の

やまと心のなかに入りなば（望東尼）